
妹がリリカルで適当に武力介入

怒離留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹がりりカルで適当に武力介入

【Nコード】

N8258S

【作者名】

怒離留

【あらすじ】

神と悪魔のパシリ？のシイルの妹が転生することになりましたが、本人の要望により男に転生。作者の現実にいる妹を転生させるお話です。神と悪魔のパシリ？を読んだ方がサクサク読めます。設定をきちんと書く予定なので読むか神と悪魔のパシリ？を読んでから読んでください。お願いします。

始まりはこの方が・・・(前書き)

フェイトが男で転生ものを書く予定でしたが、妹の意見によりフェイトはいた方がいいよ!との意見がありましたので変更することになりました。すみません。

始まりはこの方が・・・

（携帯の着信音）

シィ「はい」

俺は佐久間さんからかかってきた電話をとると・・・

佐久間「もしもし？俺！俺だけど」

シィ「佐久間さん？そのネタは古いのでは？」

佐久間「俺さ、さつき事故ったんで金が必要なんだよね。だからさ、9000万ジンバブエドルを俺の口座に振り込んでくれない？」

俺「ほぼ一円じゃないですか・・・事故をどう解決するんですか・・・」

3

佐久間「冗談はさて置いて・・・お前の妹な・・・」

な、何が起きたんだ！？俺の妹に！！

佐久間「転生することになったから！！」

俺「は？」

佐久間「で！任せるから！！」

え？な、何を！？

始まりはこの方が・・・(後書き)

執筆頑張ります。

プロローグ（前書き）

今回はシイルさん視点ですが、今回のみです。

この物語の主人公は作者の实在する妹を基にしています。質問は受け付けますが変な質問はなさないでください。 質問は受

プロローグ

さて、俺はとある場所の生体カプセルの前に居る。

シィ「さてと・・・要望道理にしてやるか！」

俺が生体カプセルの端末に多くのデータを打ち込む。要望どおりつて結構無理ありすぎないだろうか？まあ、佐久間さんがこの通りにって言っていたからな・・・頑張ろう。

1カ月間後・・・

生体ポッドには完全な男の子が！！佐久間さんから渡された妹からの要望を元に作ったメモの通りに身体はできた！

シィ「起動！ポチツとな（ポ ッキーの声）」

とは言いつつも起きないので生体カプセルから出し、ベットに寝かせ、服を着せる。服は白衣だ。

??「ん？ここどこ？」

シィ「目を覚ましたか？」

??「え！？」

男の子は起き上がった。そして俺を抱きしめた！！

??「かわいい！-！」

俺は男に抱きしめられるのが嫌なのだが、とりあえず一回は許そう

(怒) 妹だし・・・(怒)

シイ「離せ!!!」

俺は腕を振りほどき離れる。

??「な、なんで!？」

いや、急に抱きつかれたら普通嫌だろ。

シイ「状況を説明しようか・・・？」

??「え？」

シイ「俺はおまえの兄だ。お前と一緒に転生者という訳だがな」

??「!!!??」

声になつてないのか、やっと自分の体について気付いたのか。まあ、どちらでもいいだろう。

??「!!!」

なんだ!？何を思いついた!？

??「ここはもしかして・・・リボーンの世界!？」

シイ「残念だが違う。」

??「え？」

なんでそんなに絶望した顔なんだよ。
何か思いついたようだな。

シイ「ついでに言うておくとドラク　ウスの世界でもないからな。」
また落ち込んだな。

??「・・・じゃあ、ここはどこの世界？」

シイ「なにつて・・・リリカルな世界だけど？」

??「何で！！今すぐリボーンの世界に送って！！！！」

シイ「いや、無理だから。」

??「な、何で!?!？」

シイ「佐久間さんから言われてるからな。まあ、A'sまで終われば別の世界に行けるからその時は別の世界に送ってやるよ」

??「本当!?!？」

シイ「ああ、で、お前は何て名乗るんだ？転生前の名前では面白くないだろう？考えてあるのか？」

??「うん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・霧音 怜と名乗る

ことにする」

シィ「俺はシイル・デモン・ディ・ドラコだ。日本では佐々木 悠と名乗っているがな。」

怜「シイル？って呼べばいい？」

シィ「ああ、そう呼んでくれ。」

俺はゲートを開くと中から青い携帯電話と i o d と i h o n e 4、ノートパソコンを取り出す。

シィ「あと、これな」

俺はピアスをポケットから取り出すと怜に渡した。

怜「これ何？」

シィ「お前のデバイスだ。魔力粒子を発生させるGNドライブが5つ搭載されている。姿は00に出てくるガンダムだけだ。まあ、管理局からしたらこれはSSSクラスのロストロギアかもしれないがな。注意としてはこれを取られるなということと壊すなということだ。」

怜「うーん？」

シィ「あと、ダイオラマ魔法球（シイル仕様）と霧と雨のAクラスリング二つずつとボックスを16つ。」

怜「リングとボックス！？」

シィ「欲しいだろ？」

目をキラキラさせるな。キモイ

怜「欲しい」

シィ「幻術についての本も持っていけ」

俺はたくさんの本をゲートから出し、床にぶちまける。

怜「え？こ、これ全部読まなきゃダメ？」

シィ「当たり前だろ」

はつきり言っただけ全部読まないと理解できないが、こいつが全部読み切れるか俺は知らない。ちなみに俺は幻術が使えないけど有言絶対アブソリュート実行があるし、脳内君主もある。正直、幻術はあんまりいらぬ。

怜「い、いやだ！！！！！」

シィ「とりあえず、戸籍、口座の通帳とキャッシュカードは置いていくから確認しろ。」

怜「どこかに行くの！？」

シィ「あとは自分で何とかするんだな」

俺はゲートを展開し、中に入って行った。居なくなるときに佐久間さんからの手紙を落としていった……

プロローグ（後書き）

アブソリュート
有言絶対実行は言ったことが本当になるという能力で生物、物質の
両方に見える能力で吸血鬼として上位にいる者には能力の消耗が激
しく使えない場合もある。
ブレインタイラント
脳内君主は対象者の脳を操作し、悪夢をループさせたり、記憶を操
作できたりします。

この二つはこの物語にはおそらく関係ありません。

第一話（前書き）

やっとか・・・

主人公「あとがきは乗っ取られました」

第一話

俺はとりあえず、おに・・・シールが落としていった手紙を拾う。
手紙は白いとてもきれいな紙でできているようだ。

「え〜っと、私宛か・・・差出人は・・・佐久間栄太郎？」

まずは開けてみよう。

手紙の内容は・・・

おっす！オラ、栄太郎！

いきなり転生でびっくりしてつかも知れねえけど、これからのことを考えるとオラ、ワクワクすつぞ。ってネタはもういいかな？住む場所は最後の紙に書いてあるから無視して、保護者はシールだ。資産管理についてはできれば自分でしろよ。A'sまで終わったらりポーンの世界に行くことも考えてあげよう。まあ、がんばれ。ちなみにこちらではそちらのことを観察しているので面白くなるように願っている。一応言っておくが、物語を見るだけは駄目だ。と書いてあった。

二枚目には資産の詳細、三枚目には私の能力の説明、四枚目にはkonozama!というネット通販？のやり方、5枚目に転生者としての契約内容、6枚目に住む場所の住所と簡単な地図が記されていた。

現在の私の資産は日本円で1000億の銀行での貯金と株券1200億相当があった。多すぎない？他には魔法球に多くの品があるらしい。まあ、面倒なので後で確認しよう。能力については後にしよう。

う。konozama!の使い方は・・・魔法球内のパソコンや無線LANでkonozama!を検索し、そこで某密林と同じように操作すればいいのか・・・簡単だね。転生者としての義務は・・・我々を楽しませるために原作ブレイクをしなければならぬこと。他には・・・ないの?ないみたい・・・最後に住むところの略図だけど・・・私、地図読めなくらい方向音痴なんだけど、どうしたらいい?

『知らないが、自分で何とかしろ』

今何か聞こえなかった?まきい　みさんの声だった気がするんだけど!?

もしかしてシイル!?

・・・気のせいだよね?

とりあえず、魔法球でいるんなこと確認しないと・・・

魔法球の中は私の家?いや、中に入ってみると全然違うけど・・・私の部屋だけ一緒だ・・・ペンタブとパソコンがあった。ちよつと画面のサイズとか本体のケースとか違うけどパスワードからデスクトップのショートカットの配置まで一緒だ。兄のデータがないけどいや、ブックマークがそのままなのはうれしいんだけど・・・これってどうなってるの?

とりあえず、ネットはつながっているみたいだ。これでネットがつながってなかったらどうなっていたことか・・・

持ち物の確認は大事だよな?

確認中

あとデバイスの使用の確認中

説明書を読んだけど何が何だかわからない。使ってから覚えるしかないのか。

あと、このまま自分のことを私というのも可笑しいから気をつけな
いと。

気になるのはあのシュミレータとかいうのかな。どうやって使うの
かはわからないけど。

お腹すいた………

俺は台所に行き、食べられるものがないか探す。炊飯器、中身なし。
パン、無し。

カップめん、無し。冷凍食品、あるけどご飯を必要とするもののみ。
缶詰、サバ缶のみ。パスタ、あるけどソースがない。

冷蔵庫には……野菜と肉、味噌、ウーロン茶、漬物、ドレッシン
グだけ……

「とりあえず、サラダ食べるしかないか……」

『いや、作れるものいっぱいあるだろ』

何か聞こえた気がするけど気のせいだろう。あのアホ兄ならば、ご
飯を炊いてくれたり、パンを買っておいたりすればいいのに。

『自分で買いに行けよ。そして、まだ料理のレパートリー増えてな
いんだな』

あの兄に限って自分からパンを買つとかあんまりなさそうだからパンがないのは想像できたけど。

バターとお菓子類が全く見当たらなかったことを考えるに、自分だったらこれでいいだろうと思つてたんだな。

お菓子くらい買つておけよ

俺はサラダを盛りつけ、適当にドレッシングをかけて食べた。あまり腹が膨れた気はしない。

ご飯は炊いておこう。炊飯器をセットしてから、PCをつけて部屋にあつたDVDを見つつ、これからどうするかを考える。

まず、O H A N A S H Iは嫌だから逃げるとして、フェイトちゃんは見てみたいな。はやてちゃんは友達になれるなら友達になろう。

）

携帯が鳴っている

メールか……

何々……兄からか……

かてきよ35巻買った？

………買いに行かないと！

俺は財布を持ち、颯爽と本屋に向かった。

かてきよ35巻発見！！！！

走って手を伸ばすと……

ドン

俺は轢かれた……車いすに。そして転んだ……

「う、ごめんなさい！！」

車いすに乗った少女はこつちを向き、頭を下げた。どこにでもいそうな普通の9歳？くらいの女の子だ。

「だ、大丈夫！！俺はかてきよ35巻を買った！！」

俺は立ち上がる。何としてもかてきよ35巻を買った！！そして読むんだ！！死んで読めなかったかてきよの続きを！！

「え？うちも買うんですよ。かてきよ好きなんですか？」

そつなんだ。でもこの子からは私と同じような感じはしない。おそらくまだ、あちらの世界に染まっていないのだろう。

「もちろん！！かてきよ最高でしょう」

つい、答えてしまった。このワクワクしているのがわかってくれるとうれしい。

「うちも好きなんよ。私はツナがすきなんよ」

私は黒ツン・・・いや、何でもないよ。とりあえず。

「俺は骸が好きだよ。」

ごまかした。俺は立ち上がって、車いすの少女を向く。

「ん？そのペンダントは？」

車いすの少女は俺の首を見ている。おそらく、兄が・・・シイルがくれたデバイスだろう。名前はセカンドって書いてあったけど。どうしてだろう？

「これ？」

俺は首に下がっているペンダントを少女に見せる

「それって、ソレスタルビーイングのペンダント？どこで売ってんの？アニイト？ゲートズ？」

「兄に貰ったんだよ。」

家と一緒に・・・と言いたいな・・・

「へえ〜お兄さんがおるん？」

兄って顔じゃなくなっていたけどね（笑）

「最近久しぶりに会ったらくれたんだ。」

兄、死んでいたしね。俺は死んで転生する間で結構あったからかなり久しぶりな感じがする。

あっちはどうだったのかな？

「久しぶりって仕事か何か？」

「そうみたい。結構年が離れているからあんまり話さないけど。」

年は今は離れているはずだけど、年は3つ違いだった。あんまり話

さないのは俺が女だったのと、部活で忙しかったからなんだけど・・・
まあ、嘘は言っていないよね？

「なあ、ガンダム00では誰が好きなん？私は断然ロックオンやな」
俺は断然兄派です。

「俺は刹那かな。兄はフォンだって言ってたけど。」

そしてあの兄は兄ロックオン嫌いだったな。

「フォンって誰？そんなキャラ出てた？」

「外伝のキャラらしいよ」

「外伝？」

「コミックであつたはず・・・」

私は角 コミックの方に行き、ガンダム00Fを探して、あつた！

「これ！」

俺は右手でガンダム00Fを少女に見せる。

「へえ〜これが外伝か〜」

「ガンダムは結構外伝が多くて、そっちの方が面白いらしいよ。俺は読んだことないけど」

「読んだことないん？」

「ちょっとは読んだけど。あんまり納得いかないこともあるよ。」

「そうなんや〜」

「家にガンダム00に出てくる機体の設定資料があるから見る？」

「うん！行く！」

「この子どっかで見たよつな気がするなあ……」

第一話（後書き）

シィ「何で俺がここにいるんだ？」

作者「まだ、登場する予定だからな。」

シィ「はあ!？」

作者「まあ、原因は最近〇〇〇が終わったからなんだけど」

シィ「意味わかんねえよ」

作者「では次回まで、あでゆ〜」

第二話（前書き）

いつになったら戦闘するのだろうか・・・

第二話

「家に来るのはいいけど、まず会計済ませよう?」

「そ、そうやね」

車いすの少女は妙にわくわくしながら、俺の方を見ている。何が楽しみなんだ? 名前も知らない男の子の家に行くというのに……

「あ、俺、霧音 怜」

「私は八神はやてです。はやてはひらがななんよ。」

やっぱりこの子がはやてちゃんなんだ……

「はやてちゃんって呼んでいい?」

「ええよ、家も怜君って呼ぶから」

「よろしくね。はやてちゃん。」

俺は右手を差し伸べる

「こちらこそよろしく」

はやてちゃんは俺の手を握り、握手に応じてくれる。

その後会計を済ませ、俺の家に帰る。

帰り道でいろいろ話したが、いや、愚痴なのか?

話からはやてちゃんは原作通り、両親はおらず、学校には行ってい

ないらしい。

保護責任者の方達に学校には行くように言われているが、無視しているらしい。週に一回くらい来てくれるのは良いんだけど、生活費を振り込んでくる額が半端無く多くて、貯蓄だけで、人生全うできるそうさ。というか、そういうことをやりそうな人に最近なった気がするのは気のせいだろうか？シル・佐々木？どっかで聞いたな・

別人だよな？というか、確か原作では、グラハム……いや、グレハムさんとかいう方が、後見人だった気がするんだけど……
とりあえず、家に着いたので、鍵をあけると、靴がある。

「ただいま……」

「おかえり〜」

え？俺、一人暮らしでしょ？何で、女の人の声が聞こえるの？それになんか、良いにおいが……

「良いにおいやね」

「え？そうだね」

誰だ？俺しか住んでいないはずだが……

「お、そろそろだと思ったんだぜ」

だぜ？というか、やっぱり、シルか……兄か……？ちょっと待とうか？すごく笑顔で俺を迎えている。

何かあるような気がする……とても嫌な予感が……

「蓮君、おねs「怜の兄だぜ」……え？」

d(^ v ^)と自分のことを親指で指さし、笑顔でそう答える。ただ、そのとても素敵な容姿は女と思わせるものであり、男らしさは全く感じられない。

「兄の佐々木 悠だぜ！」

おそらく、魔理沙の真似をしているのだろう。ただ、恰好はジーンズに白のシャツ、紺のエプロンの装備だ。

d(^ ^)とでも表現すれば良いだろう。というか、表現しづらい。

「すみません宅配です。佐々木 悠様はいらっしゃいますか？」

宅配業者の女の人が、俺の後ろから話しかけた。

「はい、俺です。判子は……あつた」

兄はポケットからハンコを取り出し、ハンコを押すと、荷物を受け取った。

荷物でええ……

「ありがとうございました」

「どうもありがとうございました」

女の方は荷物を玄関に入れ、帰って行った、荷物を玄関に入れる時、

俺達は外に出て、その様子を見ていた。

「で？シイルさんは佐々木 悠って名前なの？」

はやてちゃんはやはり、兄を知っているようだった。

「一応、佐々木 悠って戸籍で出している。日本名ではだけどな。」

「シイルって名前はどこで使っているんですか？」

「秘密だぜ」

かなりムカつく。この言い方やめてくれないかな。

「後で役所に確認しに行きます。」

「確認するといいぜ」

「何しに来たんだ？」

「怜、お前料理するのか？栄養バランスとか考えないだろう？」

「そんなことはない」

「嘘を言え、部屋を見たら……」

「勝手に見るなよ……！」

いや、見られてまずいものは置いてないけど、兄に勝手に片づけられると、わけのわからない配置にされて使いづらくなるんだよ。こ

この兄絶対殺す！！このイライラする言い方は間違はなく生前の兄そのものだ

「私が怜君がきちんと生活するかを確認します。」

「そうしてくれると助かる。怜、これははやての家の鍵だから」

「ちょっと待って、どうしてうちの家の鍵を怜君に渡すん？」

「何を言っているんだ？学校をサボっているのは知っているんだぞ？怜に連れて行くように頼むだけだ。」

「は？俺は学校なんて行かねえぞ？そもそも俺は高校卒業してるし、今更義務教育とか嫌すぎる。」

「学校とか俺も行かないく」「佐久間さんが機嫌を悪くするからな」
・
・義務教育って大事だね。はやても一緒に行こうよ」

「いやや！」

「怜を同じクラスに転入させたから」

「なら行く」

友達いないのかな？

「真面目に勉強しろよ」

「めんどくさい」

はやてちゃんはこのままだとダメ人間になってしまうのではないだろうか？

「いやだ！」

勉強大嫌い。絶対勉強なんかするもんか。大体、俺は高校卒業したし、今更小学生とかどこの名探偵だよ。学校生活なんか寝て過ごしてやる。

「頑張れよ」

「絶対嫌だ。」

「まあ、適当にしてろ。」

「そんなことより、家に入れてくれへんか？」

俺たちは玄関ではなく外に出て話していた。シイルは荷物を地面に置いている。よほど重いのだろう。

「そうだな」

「どうぞ」

「お邪魔します。」

俺たちはやっと家の中に入っていった。

第二話（後書き）

シィ「おい、どうして俺がここにいて、魔理沙口調なんだ？」

作者「酒を飲んだ時に書いている奴だから忘れた。現在は飲んでないけど、何となくそのままにしたんだよね。」

シィ「俺の方の続きはまだなのか？」

作者「かなり続きを書くのを悩んでて困っているらしい。どっちらって、黄巾の乱まで行くかを決めてはいるのに書けない」

シィ「そこはがんばれよ」

作者「うん、頑張ってみる。」

第三話（前書き）

戦闘シーンなし・・・

第三話

家の中に入ると、廊下にあったはずの洗濯する予定だったものがない。かなり、代わりにつきかりと畳まれた服がごの中にあつた。他には、漫画が散乱していた本棚の前がきちんと整理整頓されているなど、結構違いがある。もしかしたら、この床も掃除機がかけられているのかもしれない。

「ほあ、きれいに整頓されとんな」

ドヤ顔のシイル・・・ウザ!!

「晩御飯まだだろう。用意したから食べていくといいよ」

「え!?!いいん!!やった!!」

何喜んでんのはやてちゃん!?俺は悪い予感しかしない。

「じゃあ、用意するぞ」

俺とはやてちゃんは洗面所に行き、手を洗う。そして戻ってくると案の定・・・
出された料理は・・・
マツタケの代わりごはん、エリンギ入りの味噌汁、ぶなしめじと野菜炒め、餃子・・・

俺に何を食べさせる気なのだろうか?全部俺の嫌いなキノコ入り・・・そして餃子・・・間違いなく干しシイタケが入っているものだろう。あの糞兄死ねばいいのに!!!

「ほら、残さず食べよ。」

このドヤ顔である。死ね！！今すぐ死ね！！

「いただきますー！！」

はやてちゃんが嬉しそうにご飯を食べている。嬉しそうに・・・

「どうした？ 怜？ おいしい晩御飯が冷めるぞ？」

「この鬼が！！」

俺は結局、キノコをどけて大体のものを食べた。だが、シイルに何らかの力を使われて無理やり食わされた。

絶対に絶対に俺の手で兄を殺す！！！！

「怜君、キノコ苦手なんか！ これは良いこと知った！！」

そしてこの悪い顔。 どうしてこの二人は他人（俺）の不幸で笑顔になるのだろうか。 絶対復讐してやると決め、まず、かてきよを読むことにした。 00の資料ははやてちゃんに貸してあげたが俺は読んでない。

デバイスの武器の確認にもなるので後で読んでおこう。 そう、後で。

「おーい、怜！ 食べたものの後片付けくらいはしろよ！！ 愚弟！」

あのアホ兄はアレ（キノコ料理）を食事と言い張るのだろうか？ あのボケの言っていることを無視し、俺はかてきよに集中する。

「パソコン初期化するぞ!!」

ダメだった。料理の片付けをまずしなければならぬようだ。

「したら殺す!!」

俺はキッチンへと向かい、洗い物を片付けていく。はやてちゃんは
その間に次々と俺の本棚を読破していく。

「少女漫画が多いなあ」

一つの疑問が浮かびつつ・・・

「終わった!!」

やっと、皿洗いから解放された!

「じゃあこれ持って行け」

シイルはお盆に乗った二つのティーカップに入った紅茶を俺に渡し
てくる。この香りは・・・

「ダーズリン・セカンドフラッシュ・・・」

「懐かしいだろ?おいしく淹れておいたからはやてと飲むといい。
マシユマロもいるか?」

シイルは何もないところからマシユマロの入った袋を取り出し、俺に
渡してくる。お盆を右手に持ち、マシユマロの入った袋を左手で受
け取り、はやてちゃんのいる部屋に持っていく。

「はやてちゃん、お茶を持ってきたよ。」

「ん？ありがとうな」

はやてちゃんはカップを受け取り、香りを楽しんでから紅茶に口をつける。

「おいしい」

紅茶の淹れ方、生前より格段においしい。香りも良い。高い葉を使っているだろうが、紅茶は淹れ方だけでも葉の本来の味をダメにしてしまう。現に俺は幾度となくダメにした。兄は蒸らす時間は勘だと言っていた。葉により淹れ方は異なるらしいが俺は知らない。ちなみにコーヒの淹れ方は知らないと言っていた。

「マシユマロいる？」

「いただくわ」

はやてちゃんはマシユマロの袋からいくつか取り出し、口に入れる。俺は紅茶に浮かべ、それを眺めながら、これからのことを少し考える。シイルに聞いた話によれば、現在俺は魔王様と同じ私立聖祥大附属小学校3年生で4月らしい。つまり、原作開始までの時間は残り少ない。一応まだジュエルシードはまだ落ちてきてないらしい。ひとまず安心だが。

闇の書についてはすでに手は打ってあるらしく、問題ないらしい。ある程度簡単な流れでハッピーエンドになるらしい。俺がよほどアホなことをせず、ヤンデレでバットエンド以外は。

「どんだけ簡単な流れですか！これって、ばらしていいの？良くないよね？佐久間さんを満足させられなかったら俺、かてきよの世界にいけないんだけど！！！」

「どうしようかな・・・」

「何を悩んどるん？」

「なんでもないよ。ただ、俺は何をすべきなのか考えていただけ」

「悩んでも良い考えが浮かばないなら漫画を読めばいいんよ」

「いや、ダメだろ」

「思わず突っ込んだけど、絶対本気で言っている目だ。」

「良い結果を出すには日々の努力だ。」

「兄からのありがたい言葉・・・だが、兄よ、生前努力したことないって言ってますでした？」

「努力とか面倒や〜」

「努力の結果、おいしい紅茶やコーヒーが淹れられるようになった。努力は大事だ。」

「え？そこなの？」

第三話（後書き）

シィ「イージーモードです。」

作者「私も結構妹に甘いところあるよね?」

シィ「だが、いい加減にしてほしいところがいっぱいあるな・・・」

作者「たとえば・・・現在近くにある妹の机が汚くて片付けようか本気で迷うとか?」

シィ「洗濯物片付けないとか?」

妹「片付けるって言うてるでしょ!!!うっさいな!!!疲れてるんだよ!!!」

現実の妹はこの小説よりひどくないかもしれないけど、私の精神をガリガリ削ります。

作者の心の声（今日こそブ ジャーをネットに入れて洗濯の予約したのかな?）

伏字意味あるかな?

P.S

妹と怜の髪がロングかショートで言い争いました。

結果、絵を書くからそれを載せることになった。

まだ書かれていないのでわからない。

私はショートでと言いました。

設定（前書き）

前回は話した怜の絵、ありました。
>>ではなかったたので消します。
(たぶんこれであっているはず)

設定

霧音きりね
怜れい

容姿

白銀髪ロング（下ろすと腰より長い）いつもはおろしているが何かする時はポニテ

ただし、幼少期は髪が黒。

瞳は藍色、首からソレスタルビーイングのネックレス（デバイス）
カツコイイ系のイケメン

身長は高め（成長すると178cm）

体重（成長すると66kg）

口調

一人称は俺

「は？」「うぜえ」「は？馬鹿じゃん」

人を小馬鹿にしたような感じでも偶にいいことやカツコ良いことを言う

前世が本当に女なのが気になるくらい男口調。

性格

S。クール（笑）頭で色々と考えているがそのまま発言すると馬鹿なのでしゃべらない。可愛いものが好き。巨乳が嫌い。前世は腐女子。

元が女なので女心がわかる（ただし、女つてめんどくせえ〜と真剣とかいてマジに言っていた）。男は単純だと思っている。本人もかなり単純

趣味

音楽。ピアノ演奏。サクセス演奏。

好き

骸×ツナ。ニ ニコ動。可愛いもの。風 様。高いところが好き。

苦手

猫（前世が猫アレルギー）。キノコ。茄子。勉強。

能力

ファーストフラット
吸血鬼

血液中にVウイルス（ry

ムーンタイズは脳内君主のみ

霧と雨の属性の炎

以下略

幻術

フランくらい

シイルに渡されるもの

携帯（青）iP d、iP one4、パソコン、日記帳。

仮面ライダーの変身ベルト（電王、ディケイド、W）

魔力粒子太陽炉5基搭載のデバイス。

お金（数億）

作者から一言

髪は切る予定？
後、生活がだらしない
現実の妹に幻想を求めな！

デバイスと魔力粒子太陽炉

魔力粒子太陽炉

魔力粒子太陽炉はガンダム00で登場するGNドライブと同じように魔力粒子を発生させて魔力粒子で同じようなことができる。魔力粒子太陽炉には魔力粒子を発生させる特性を持つ波を発生させる小さな魔石が入っている。魔石はかなり稀少でシルも6基の太陽炉のみしか創れていない。ガンダム00で創られた6基の太陽炉に対応するものである。

魔力粒子は魔力素・魔力よりさらに細かい粒子であり、AMFの発動範囲内では魔力粒子の使用はもちろん可能。さらに魔力が発生せず、魔力素しか存在しないので、通常より、コンマ数%粒子生成量上がる。

魔力粒子擬似太陽炉はこの魔力粒子太陽炉の仕組みが理解できていれば結構簡単に作れるが、魔法的運用、デバイス化、生物への魔力粒子の影響などの問題に時間をかけなければならぬ。更に、魔力粒子コンデンサ、魔力粒子貯蔵タンク、トランザムシステムなどの研究をしなければならぬ。魔力粒子太陽炉は管理局としてはどこから手が出るほど欲しいものであり、デバイスの技術力についてはそれ以上にのどから手が出るほど欲しいものであろう。だが、シルの作ったシステムによりこれらは解析不能であり、クラック不可能である。仮に管理世界の技術力を総動員しようが、転生チートオリ主が解析使用が不可能である。いくら解析しようとも、シルが

管理するヴェーダ並みの能力を持つ大型サーバーの監視がある限り不可能である。

ちなみに、次元連結システムは能力の制御に失敗し、お蔵入りになった。

シイルが創った魔力粒子擬似太陽炉は生物への魔力粒子の影響を問題なくクリアし、デバイスとのマッチングもクリアした。セカンドの中に1つ入っていたりする。

セカンド（デバイス名）

シイルが創ったチートデバイス。分類はアームドデバイスのはず・
・。起動する機体は全身を覆う鎧のようになる。機体を装着した使用者は本人の命令、もしくは命にかかわる場合を除き解除されない。装着者の命が危ない場合、装着が強制排除されるが、シイルが起動実験を行った際には一度もそういう事態に陥ったことは無く。寧ろ、装着している方が命の危険が減る場合が多く、生命維持装置も付いているので結構安全で、装着していればどのような空間でも活動可能である。ただし、ガンダム00のガンダムと一緒に水中戦では魔力粒子の威力は激減する。

このデバイスは本来はファーストというデバイスに6つの太陽炉と第二世代から第四世代までのガンダムが入っていたが、Oガンダムの太陽炉以外を入れ、シイルが気に入っている第二世代とその他を取り除いた。アニメ版の4機とその発展型、その強化パーツが入っている。シイルが第二世代のガンダムが好きなので第三世代、第四世代、第五世代ではシステム、武器の差だけで機体の差は結構少なく、粒子運用率はほぼ高い数値で安定させられている。

シイルはOガンダムに搭載された太陽炉を持っており、残りはすべてこのデバイスに搭載されている。第4世代と第5世代は第3世代

でのデータをもとに最適化をしているため、使用不可能。ただし、シュミレータでは使用可能。

魔力粒子は太陽炉、GN粒子貯蔵タンク、GNコンデンサー内にエネルギーが残っている限り、粒子を使うことはできるが、虚数空間などの魔力が存在しないところでは本来、太陽炉でエネルギーをつくることはできないのだが、太陽炉内に膨大な量の魔力が貯められているため、年単位で魔力粒子が切れることは無い。ガンダム00では第2世代を基に第3世代のガンダムがつくられてるが、このデバイスのガンダムは1から作り直されている。理由は第2世代のガンダム達の完成度が高すぎて、面白くないという理由からである。なので、一部制限がされている機能がある。(トランザムは使用可能)

搭載されている機体は

第三世代

ガンダムエクシア

フル装備・GNアームズTYPE-E・アヴァランチダッシュの装備は入っている。

リペア?ねえよそんなもん。

ガンダムデュナメス

GNフルシールド・トルペードユニット・TYPE-Dの装備は入っている。

超高高度射撃銃は入っていないが、その代わりにGN超高压縮超遠距離射撃銃が入っており、超高高度射撃銃より計算が大変だが、威力は保証できる。

ガンダムキュリオス

テールユニット・テールブラスターはあるが、ガストユニットがない

ガンダムナドレ

アクウオスユニットなし

ガンダムヴァーチェ

ナドレの装備ユニット?である。もちろんパージ可能。フィジカル
の装備も入っている。

第四世代

ダブルオーガンダム

オーライザー・ザンライザー・セブンスソード/Gの装備が入って
いる。

二つの太陽炉が安定しているため、オーライザーがなくてもトラン
ザムが使用可能。

ケルデイルガンダム

GNHW/Gに換装可能だが、サーガにはなれない

アリオスガンダム

GNHW/Mに換装可能だが、アスカロンにはなれない

GNアーチャーは八口が制御し、アーチャーアリオスになることが
可能。

セラヴィーガンダム

GNHW/B・GNHW/3Gに換装可能

セラフィムと分離できるが、起動するときどっちを主にするか決め
て、どちらかをビットにしてビットにしたほうはGNタンクで起動

することになる

セラフィムガンダム
単体で起動可能。逆は不可

第五世代

ダブルオークアンタ
フルセイバー使用可能

ガンダムサバーニヤ
最終決戦仕様に換装可能

ガンダムハルフト
最終決戦仕様に換装可能

設定（後書き）

たぶん見てわからない人が続出すると思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8258s/>

妹がリリカルで適当に武力介入

2011年10月7日23時14分発行